

シンポジウム「最新の気象学が描き出す多彩な大気海洋結合現象」

日時: 大会第3日 (5月27日 [土]) 13:30-17:00

会場: 国立オリンピック記念青少年総合センター 大ホール (カルチャー棟)

司会: 松本 淳 (首都大学東京 地理学教室)

シンポジウムには一般の方もご参加いただけます。ただし春季大会参加登録をされていない方は、
参加登録ページ (<http://www.metsoc.jp/?p=5906>)での事前登録 (無料) が必要です。

趣旨

海洋は地表面のおよそ7割を占め、海面水温と海水分布は、より速く移ろいゆく大気にとっての下方境界条件となる。その一方で、大気は風応力や海面熱・水・放射フラックスを介して海洋や海氷に熱的・力学的強制をもたらす。この大気-海洋間の双方向の影響の揺らぎに伴って大気海洋結合変動が起こる。2014年夏に始まったエルニーニョ現象は、各国の予報機関による大方の予測に反して弱いまま推移したのち、翌2015年になって観測史上3番目の強さにまで発達し、遠隔影響を介して世界各地に異常気象を引き起こした。このように熱帯大気海洋結合変動が中高緯度の気候に影響する一方で、これまでの研究では、中緯度海洋はこれに受動的に応答するだけと思われていた。しかし最新の研究により、中緯度の海洋変動が能動的に大気変動を駆動する例も見い出されている。他方、北極域の海水変動は大気に熱的に影響し、中高緯度帯に異常気象をもたらす可能性が指摘され、活発な研究がなされている。2017年は、このような海洋や海水と大気との相互作用の理解に挑む2つの国際キャンペーン — 海大陸研究強化年 (YMC) と極域予測年 (YOPP) — の開始年に当たる。

大気海洋系の相互作用に対する研究への機運がこのように国際的な高まりを見せる中、本シンポジウムでは多彩な大気海洋結合現象を最新の研究成果を交えて概観し、さらなる研究への取り組みを展望する機会とした。講演は熱帯から極域に渡る多様な大気海洋結合現象を包括するよう企図した。このシンポジウムが大気海洋相互作用研究の意義と魅力を幅広い方々に知っていただく機会となれば幸いである。

プログラム

1) ENSO の監視と予測

安田 珠幾 (気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課)

2) YMC: 海大陸域における大気-海洋-陸面相互作用研究

米山 邦夫 (海洋研究開発機構 大気海洋相互作用研究分野)

3) 熱帯大気海洋結合変動をもたらす東アジアへの遠隔影響

小坂 優 (東京大学 先端科学技術研究センター)

4) 気候系の Hotspot: 中緯度の暖流や水温前線が及ぼす気候系への影響

中村 尚 (東京大学 先端科学技術研究センター)

5) YOPP: 北極観測と予測可能性研究の融合

猪上 淳 (国立極地研究所 国際北極環境研究センター)

6) 総合討論

司会: 松本 淳 (首都大学東京 地理学教室)

※各講演時間は質疑応答を含めて30分です。